OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイツ極右の着実な伸張
Author(s)	木戸, 衛一
Citation	阪大法学. 2007, 56(5), p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55229
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論　説

ドイツ極右の着実な伸張

木戸衛一

一　はじめに　――「陽気な愛国主義」？

「世界よ、友だちのもとにようこそ」をモットーに、二〇〇六年六月九日から一カ月間にわたりドイツで開催されたサッカー・ワールドカップでは、ホスト国の至る所で国旗が打ち振られ、「黒赤金」のグッズが氾濫するという予想外の事態が生じた。

このことに驚いたのは、ドイツ人自身である。アレンスバッハ世論研究所の調査によると、ドイツ人の五八％が「驚いた」と答え、「当たり前の現象だ」とする三八％を大きく引き離した(1)。多少なりとも戦争の影を引きずる四五歳以上の世代では、「驚いた」が六三％に達した。逆に、一六～一九歳の若い世代では、「当たり前」が五一％を占めた。また、三〇歳未満の五八％は、自分自身も国旗などを身に纏ったという。

「黒赤金」は、もともと一八一八年頃ブルシェンシャフト運動において民主的自由・民族統一のシンボルとして登場し、一八四八年革命時フランクフルト国民議会によって「国旗」として定義され、ヒトラー政権下「ハーケン

クロイツ」に取って代わられた過去をもっている。戦後西独では、一九四九年五月八日の議院評議会決定（反対は一票のみ）を受け、基本法第二二条に「連邦国旗は黒赤金である」ことが記された。他方東独でも、一九五九年一〇月に中央に国章（環状の麦の穂に囲まれたハンマーとコンパス）が付け加えられるまでは、「黒赤金」が国旗であった。したがって、一九九〇年の「統一」当時、国歌に比べ国旗をめぐる論議は非常に静かであった。

今回のワールドカップで、ポーランドやガーナ出身の選手も主力として活躍するドイツ代表を、地元のファンが定住外国人と一緒に応援する「黒赤金現象」は、「陽気な愛国主義」と形容された(2)。「黒赤金は、旗の前での直立不動ではなく、誰も恐れる必要のない社会とのリラックスした一体化を意味する」というわけである。

先に紹介した世論調査でも、「このように観客がドイツ・チームと一体化したのはすばらしい」が七一％、「ドイツにも他国と同じように国民感情が存在することを示した」が六二％、「本物の連帯感が存在した」が五七％と、実に肯定的に受け止められている。「どちらかと言えば流行だ」という冷めた見方は一九％にとどまり、まして「ドイツ人がこのような国民感情を発展させたら、危険だ」とか「国旗は本当に不愉快だった」という否定的意見はそれぞれ三％にすぎなかった。実際、ワールドカップでの国歌斉唱で「ナショナリズムとドイツ基本文化の雰囲気が運び込まれる」のを懸念し、「ドイツ国民への恐ろしい賛歌」を警告したウルリヒ・テーネ教育科学労組委員長の発言は、『ビルト』紙を初め各方面からの反撃にあい、完全に封じ込められた(3)。

ワールドカップが終了した翌日の七月一〇日、国連のコフィ・アナン事務総長は、「世界はもはや、ドイツにおける過度の愛国主義に不安を抱いていない」と非常に好意的な感想を述べた。フランク＝ヴァルター・シュタインマイアー外相は、「ドイツ人の《自己変化》」の素晴らしさを称え、ホルスト・ケーラー連邦大統領も、「新しいナショナリズムという大仰な政治行動をすることなく、自分たちの旗への賛同を表明する……よき愛国主義」と評価

した。普段はドイツ人の歴史意識に手厳しい、在独ユダヤ人中央評議会のシャルロッテ・クノープロッホ会長ですら、「自分の国に対する国民のこれほど自然な関係は、滅多に見たことがない。黒赤金を頬にペイントしたり、肩に背負ったりする自意識ある手軽さは、とにかくすばらしかった」という手放しの褒めようである。(4)

しかし、「愛国主義」は、ワールドカップで突然人口に膾炙したわけではない。二年前の二〇〇四年五月二三日、連邦大統領に選出されたケーラーは、「私は国を愛する」と公然と語った。社会民主党（ＳＰＤ）から初めて大統領となったグスタフ・ハイネマン（任期一九六九～七四年）の「私は国家を愛さない。妻を愛する」という台詞と比べると、まさに隔世の感がある。

「愛国主義」の概念は、同年一二月六～七日、デュッセルドルフでのキリスト教民主同盟（ＣＤＵ）第一八回党大会でかなり唐突に提起された。ラウレンツ・マイアー幹事長が、赤緑連邦政府を「国民との感情的な関係がない」と非難したのに対し、フランツ・ミュンテフェリング党首は、「ＳＰＤは、誰からも愛国心の欠如を非難される必要がない」と反発、ゲアハルト・シュレーダー連邦首相も、「愛国主義とは、日々私が行っていることだ」と切り返した。

二〇〇五年九月一八日の連邦議会選挙を経て連邦議会議長となったノーベルト・ラマート（ＣＤＵ）は、一つの社会におけるすべての文化の悪平等を肯定するかのような「多文化性」の限界を指摘した。この発言に刺激されたＣＤＵザクセン州支部では、「メディア・学問・学校における《六八年世代》の支配的解釈と、それと結びついた愛国主義的立場への不信を克服」するという「精神的転換」を求め、「国家と市民の一体化に資する」ために、国歌斉唱を小学校で義務づける提案すら行われた。(5)

ナチズムの過去を背負うドイツでは、「ナショナリズム」はどうしても否定的なニュアンスを帯び、これを主張

する政治勢力は極右の範疇に入れられる。他方「愛国主義」は、ごく「普通」の概念として、容認あるいは称揚される。

しかし、「ナショナリズム」と「愛国主義」とは、それほど截然と区分できるものであろうか。たしかに、「陽気な愛国主義」自体は、排外主義と無縁の、むしろ極右を当惑させる現象であった[6]。そうだとしても、ナショナルな感情の表出という点で両者は繋がりをもつのであり、「ナショナリズム」は危険だが「愛国主義」は人畜無害だとは言い切れないのではないだろうか。

二　ワールドカップ直前の不安

「極右」のメルクマールは、法学・政治学的アプローチでは、特定の政党・団体への所属・投票、社会心理学的アプローチでは、不平等のイデオロギー（外国人敵視・反セム主義・ナショナリズム・指導者原理）の信奉と暴力肯定の態度である[7]。大方の専門家は、ドイツにおける極右のポテンシャルを一三％程度と見てきた。

「統一」という名の、西独による東独の併呑の後、極右暴力による死者は、合計一三〇人以上に達すると言われるが[8]、ドイツ社会で極右問題が大きく取り上げられたのは、大別して三つの時期である。

① 一九九一年九月一七日ホイアースヴェルダ（ザクセン州）や、一九九二年八月二二日ロストック＝リヒテンハーゲン（メクレンブルク＝フォアポンメルン州）での難民収容所襲撃、一九九二年一一月二三日メルン（シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州）および一九九三年五月三〇日ゾーリンゲン（ノルトライン＝ヴェストファーレン州）での定住トルコ人住宅への放火殺人など、センセーショナルな事件が相次いだ。

② 一九九八年四月二六日、ザクセン＝アンハルト州議会選挙で、ミュンヒェンの新聞社主ゲアハルト・フライ

（Gerhard Frey）が率いるドイツ民族同盟（ＤＶＵ）が、突如一二・九％も得票し、第四の政党として一一六議席中一六議席を獲得した。

③　二〇〇〇年には、四月二〇日（ヒトラーの誕生日）にエアフルト（テューリンゲン州）、「統一記念日」前夜にデュッセルドルフ（ノルトライン＝ヴェストファーレン州）でシナゴーグが放火され、六月一四日には、デッサウ（ザクセン＝アンハルト州）で、モザンビーク出身のアルベルト・アドリアーノ氏（三九歳）が、三人のスキンヘッズに惨殺された。

二〇〇一年に入り、極右政党の中で最も戦闘的と目される国民民主党（ＮＰＤ）に対し、連邦政府・連邦議会・連邦参議院による違憲提訴が起こされた。ところが、ＮＰＤの幹部の中に、憲法擁護庁への情報提供者がいることが発覚し、翌々年三月一八日、連邦憲法裁判所は、審理取りやめを決定した。これ以降、極右絡みの報道は、かなり下火になった。

しかし、言うまでもなく、極右をめぐる問題そのものがそれで解消したわけではない。とりわけ、ドイツ社会における暴力のポテンシャルの高まりは、学校を中心に顕著である。二〇〇二年四月二六日には、エアフルトのグーテンベルク・ギムナジウムで、元生徒が教師・生徒計一六人を射殺するという米国並みの事件が起こった。二〇〇六年二月末には、生徒の八三％が外国人で、深刻な校内暴力に悩むベルリン＝ノイケルンのリュトリ基幹学校の教師たちが、救済を求める書簡を送っている(9)。

このような状況を背景に、極右政党は、二〇〇四年九月二一日の州議会選挙で、ブランデンブルクのＤＶＵが議席を維持、またザクセンのＮＰＤも議席を獲得した。したがって、ドイツがワールドカップのホスト国として極右暴力に不安を抱いていたのも、十分な理由があった。

その不安は、大会直前の五月一六日、エチオピア出身でドイツ国籍を持つエルミアス・ムルゲタ氏（三七歳）が、ポツダム（ブランデンブルク州）の停留所で、暴漢二人に襲われ意識不明になった事件で、一気に強まった。彼は約二〇年同市に住み、ドイツ人の夫人との間に小さな子どもが二人いた。河川工事の技師として働いた経験のある彼は、事件当時博士論文を執筆中であった。

翌日、第一次シュレーダー政権で連邦政府スポークスマンだったウーヴェ＝カーステン・ハイエが、ドイツ・ラジオで「ブランデンブルク州の中小都市など、肌の色の異なる人が行ったら生きて帰れない場所がある」と発言した。SPD党紙『フォアヴェルツ』の編集長で、「世界に開かれたドイツ」行動協会の創立者でもある彼の憂慮は、それほど深かったのである。

これに追い打ちをかけるように、一九日、クルド系のギヤセッティン・サヤン・ベルリン市議（左翼党、五六歳）が、地元リヒテンベルクで二人の若者から罵られたうえ暴行され、頭部に重傷を負った。彼も、ドイツ在住三五年に及び、ベルリン自由大学で政治学を修め、左翼党議員団の移民政策スポークスマンであった。

二二日には、ヴォルフガンク・ショイブレ内相（CDU）が、二〇〇五年度版憲法擁護報告書を発表した。それによると、極右犯罪は前年より二七％増の一万五三六一件、うち暴力行為は二三・五％の九五八件、暴力的極右の人数は四〇〇人増の一万〇四〇〇人であることがわかった。内相は、「外国人にとって立入禁止地帯（No-Go-Areas）が存在してはならない」と述べる一方で、取り締まる警察の熱意が足らないという批判は「無根拠」と退けた。

ワールドカップが始まった六月七日、アフリカ評議会と国際人権連盟は、人種攻撃を防止する五カ国語のホームページを開設した(10)。さらに大会期間中の二四日、ザクセン＝アンハルト州の州都マグデブルク近郊にあるプレー

ツィエンでの夏至祭で、『アンネの日記』と星条旗が焼かれるという事件が起こった。夏至祭は、大きな火の回りで歌ったり踊ったりする古代ゲルマンの祭とされているが、ナチスにより、総統に忠誠を誓う儀式へと悪用された。『アンネの日記』の焚書は、ナチス犯罪の肯定を意味し、民衆扇動罪（刑法一三〇条）に該当する。ところが、駆けつけた警官は、『アンネの日記』がどういうものか知らなかったため、単なる騒擾事件として処理されるところであった。

このように、「陽気な愛国主義」が高揚している最中でも、極右は、その存在を誇示したのであり、散発的にせよ「過度の愛国主義」は表出していたのである。

三　極右現象の基層

極右は、国家・民族との一体化という「自然な」秩序を強調する民族共同体のイデオロギーを信奉する。そして、技術的というよりも文化的諸現象に敵対する反近代主義、自由主義・個人主義・国際主義・多文化主義などの排撃、人種主義・エリート主義的な色彩を帯びた社会ダーヴィニズム、常に暴力を秘めた行動主義・戦闘性・「英雄主義」といった価値を掲げる(11)。

あたかも一握りの存在に映る極右の背後には、それを支える広範な住民層がいる。ライプツィヒ大学医学部のブレーラー教授らの調査によれば、①右翼権威主義独裁、②ショーヴィニズム、③外国人敵視、④反ユダヤ主義、⑤社会ダーヴィニズム、⑥ナチズムの無害化という極右的諸価値のうち、全般的に賛同する割合が高いのは、②と③である。二〇〇四年秋の時点で、「われわれはついに、強力な国民感情への勇気を再びもつべきである」というショーヴィニスティックな見解には三九・二％（東三五・五％、西四〇・八％）、「ドイツは、多数の外国人を通じて、

図1　「強力な国民感情への勇気」を支持する割合の推移

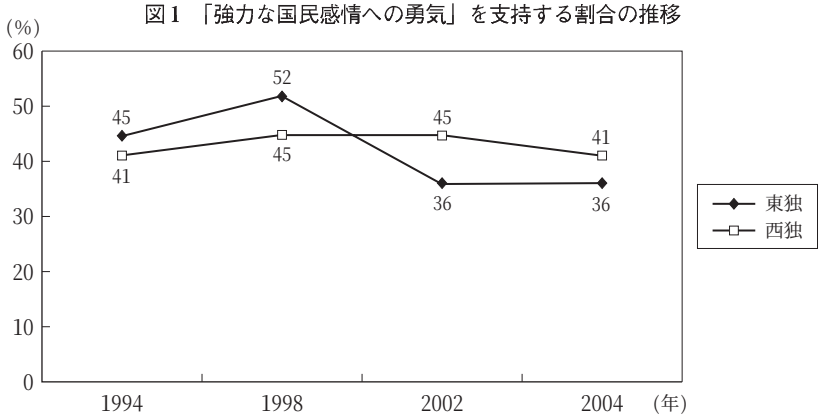
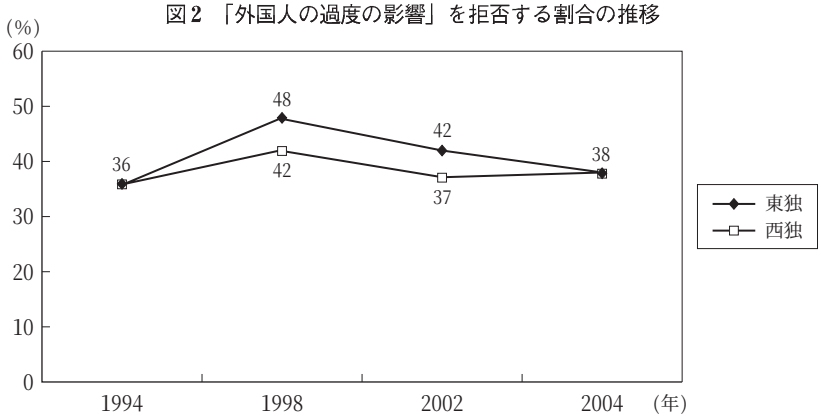


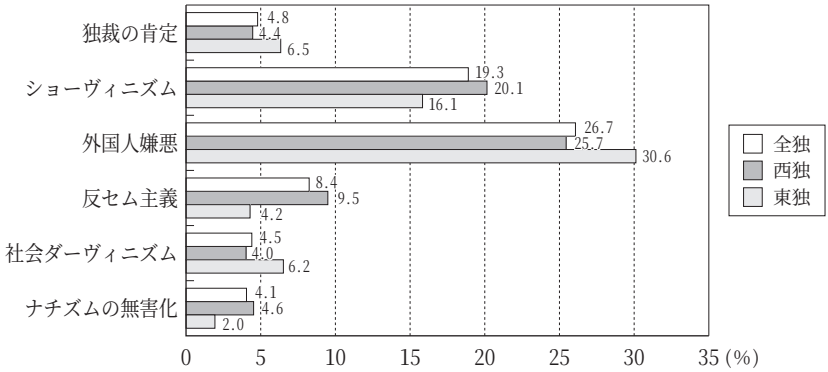
図2　「外国人の過度の影響」を拒否する割合の推移



危険なまでに過度の影響を受けている」という外国人敵視の見解には三七・七％（東西同率）が支持を与えている（図1・図2参照）[12]。

この②・③のうち、内発性が強いのは、言うまでもなく前者である。そうした心性は、「統一」ドイツにおける「自意識」の増大、「ナショナル・アイデンティティ」の強調と密接に関係している。一九九〇年当時、「新しい愛国心」を四三％が不快に思い、これに好感を抱いたのは二二％にすぎなかった[13]。また、一九九四年の時点で、「ドイツの歴史は、この国で国民感情やナショナル・シンボルを大

図3　ドイツにおける極右的態度



事にするのを禁じている」と考える割合は四四％であった。この数値は、今日では二二％に文字どおり半減している。そこには、歴史解釈における保守と極右のイデオロギー的親和性も確実に影響を及ぼしていると思われる(14)。

ブレーラー教授らの最新の調査結果は、一一月八日、ＳＰＤ系のフリードリヒ・エーベルト財団の委託による「周辺から真ん中へ―ドイツにおける極右的態度とその影響要因」として公表された(15)。それによれば、一貫した極右的世界観の持ち主は、西（九・一％）が東（六・六％）を上回っている。つまり、極右が東独青少年に特有の現象とする見方は偏見にすぎないのである（図3～6参照）。

こうした極右的態度が特に強い州は、西ではバイエルン州、東ではメクレンブルク＝フォアポンメルン州とされる。個別的な設問に即して見てみると、「ナチズムにはよい面もあった」には一一・〇％（東八・七％、西一一・六％）、「外国人がここに来るのは、われわれの社会国家を利用するためだけだ」には三七・〇％（東四三・八％、西三五・二％）、「価値のある命と、価値のない命とが存在する」には一〇・一％（東一一・四％、西九・八％）、「ドイツを強力に統治する指導者が必要だ」には一五・二％（東一七・五％、西一四・六％）が賛同している。

図4　極右的態度の推移（全独）

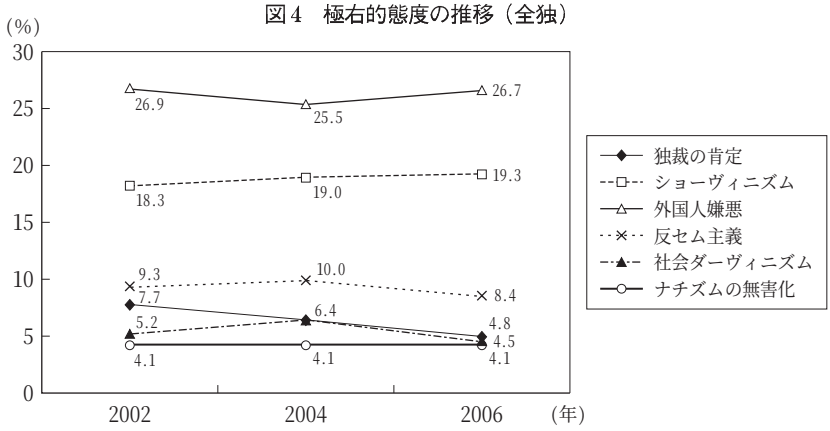
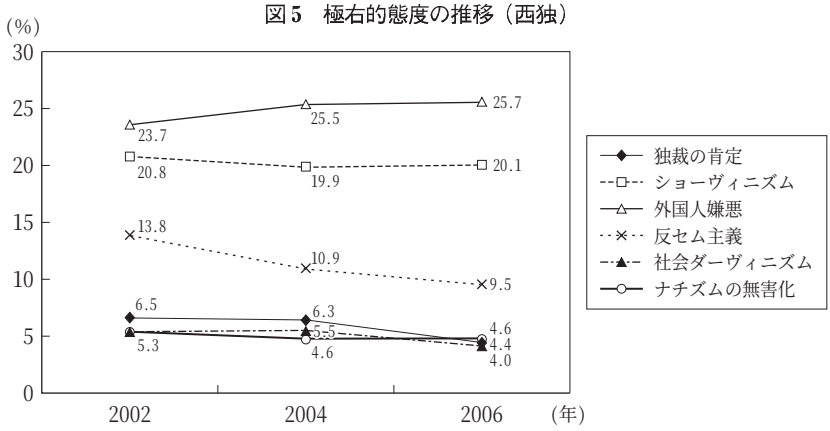


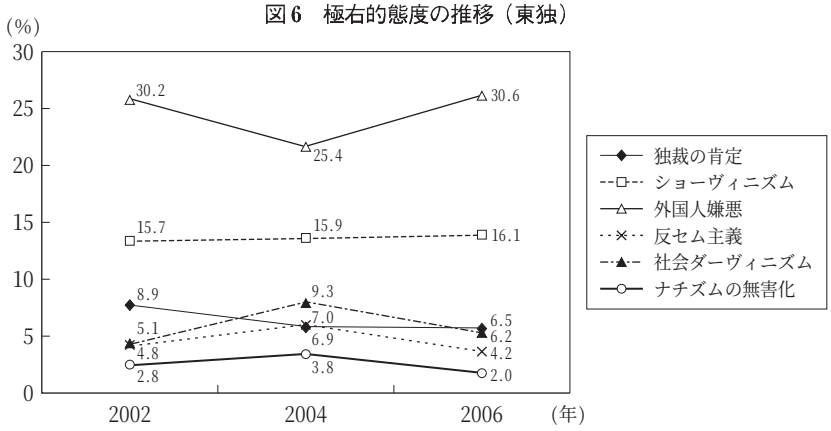
図5　極右的態度の推移（西独）



従来の調査と比べると、外国人嫌悪は相変わらず高く、ナショナルなショーヴィニズムは東独で増大している。調査者は、あたかも社会の周辺的現象であるかのような印象を与える「極右」の概念を批判し、「社会の真ん中における政治問題」への注目を促している。

他方で注目すべきは、とりたてて思想性をもたない若者が、サブカルチャーを通じて、極右に引き寄せられつつある実態である。たとえば、ディスコ・パーティーやヘビメタ・パーティーで、人種差別・暴力賛美の音楽が流され

図6　極右的態度の推移（東独）



る。代表的なのは、ＮＰＤが学校の前などで配っている「校庭ＣＤ」で、そこでは「新しい価値」（Noie Werte）というバンドが、「俺はお前の名前を知っている。俺はお前の顔を知っている。お前は、こぶしで鼻をへし折られるのにふさわしくない」と、強者意識をくすぐっている。(16)

ほかにも、ファッションの世界では、Consdaple というブランドがあり、ジャケットを広げれば、ナチ党の略号ＮＳＤＡＰが目立つ仕掛けになっている。また、一見何気ない数字の「18」が「アドルフ・ヒトラー」、「88」が「ハイル・ヒトラー」を示して、ナチス賛美に使われる。ほかにも、インターネットの世界や、反キリスト教・ゲルマン神話崇拝など、さまざまな場面で、極右は若者の間で文化的ヘゲモニーを握りつつある。このようなことを背景に、ハーケンクロイツの落書きや煽動スローガン、ナチ・シンボルの表示が顕著に増加しているのである。

これまで極右的な態度は、女性より男性、高学歴より低学歴、有職者・主婦などよりは失業者に特徴的だとされてきた。しかし、長引く不況や社会福祉制度の解体により、それは、学歴の高い層などに広がりつつある。

ザクセン州憲法擁護庁によれば、同州における極右の数は、人口一〇万人当たり七五人と、一六州中最悪であるという。(17)以下、ベルリン（七

一人）、メクレンブルク＝フォアポンメルン（七〇人）、ザクセン＝アンハルト（五九人）、ブランデンブルク（五四人）と、軒並み旧東独諸州が上位を占めている。全国平均は四七人、最も少ないのはノルトライン＝ヴェストファーレンの二七人であるが、前述のフリードリヒ・エーベルト財団の調査報告が示唆するとおり、西独地域でいつまでも低水準にとどまっているという保証はない。

四　「右からの人民戦線」

ドイツの極右政党としては、ＮＰＤ、ＤＶＵ、共和党が代表格である。このうち、一九八三年一一月に設立された共和党は、創立者フランツ・シェーンフーバー（Franz Schönhuber）の過激な言行で注目を集め、一九八九年一月二九日の西ベルリン市議会選挙で七・五％、同年六月一八日の欧州議会選挙で七・一％を獲得した。「統一」後も、一九九二年のバーデン＝ヴュルテンベルクやベルリンなど、その勢いをしばらく保った。一九九四年党首の座となったラルフ・シュリーラー（Ralf Schlierer）は、ある種洗練された政党を目指したため、却ってシェーンフーバー追放などの内紛を起こし続け、現在党勢は低迷している。

ＤＶＵは、一九七一年一月に誕生した。一九七五年、ＮＰＤ副党首になり損ねた創設者フライは、一九八七年三月にＤＶＵを政党化、ＮＰＤと連携し、九月のブレーメン市議会選挙で議席を獲得した。「統一」後は、一九九一年のブレーメン市議会選挙を皮切りに、散発的に議会進出を果たしている。ただし、ＤＶＵは、あくまでフライの個人政党であるため、議院活動では力量の乏しさを露呈している。

一九六四年一一月に結成されたＮＰＤは、現存する極右政党の中で、最も古い歴史を持つ。不況の追い風を受け、一九六六～六八年に七つの西独州議会で議席を獲得した[18]。その後長らく不振が続いていたが、「統一」後、禁止さ

表1 「統一」ドイツにおける極右政党の議会進出状況

NPD	DVU	共　和　党
	1991.9.29　ブレーメン市議会選挙 6.2%	1992.4.5　バーデン＝ヴュルテンベルク州議会 10.9%
	1992.4.5　シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州議会選挙 6.3%	1992.5.22　ベルリン23区議会選挙 8.3%
	1998.4.26　ザクセン＝アンハルト州議会 12.9%	1996.3.24　バーデン＝ヴュルテンベルク州議会 9.1%
	1999.9.5　ブランデンブルク州議会 5.3%	
2004.9.21　ザクセン州議会 9.2%	2004.9.21　ブランデンブルク州議会 6.1%	
2006.9.17　メクレンブルク＝フォアポンメルン州議会 7.3%		

れたネオナチ団体のメンバーなどを糾合して、急速に勢力を拡大した[19]。

ＮＰＤに合流した大物のネオナチに、マンフレート・レーダー（Manfred Roeder）がいる。彼は、ネオナチ・グループを率いて難民収容所を放火させ、またハンブルク社会研究所の展覧会「国防軍の犯罪」を妨害するなどの前歴がありながら、九〇年代半ば、連邦軍に招待され講演を行っていたスキャンダルを暴露された人物である。

また、ＮＰＤの傘下に入っていった団体には、「スキンヘッズ・ザクセン＝スイス」（ＳＳＳ）がある[20]。一九九七年のこの組織設立には、それ以前に禁止されたヴァイキング青年団やＮＰＤ役員が関与していた。外国人・麻薬患者・左翼を「浄化」する目的で、青少年クラブの襲撃、暴行・脅迫、さらに武器所有も働くＳＳＳを、ザクセン州内務省は、二〇〇一年四月に禁止した。ところが、その後も活動は活発で、当局は摘発に乗り出さざるを得なかった。

その他にも、ＮＰＤは、共和党や、二〇〇一～〇四年にハンブルク市庁の一角を占めた法治国家的攻勢党（ＰＲＯ、

通称「シル党」）の幹部を引き込んでいる。極めつけは、二〇〇五年九月の総選挙に際し、選挙連動期間中急逝した第一六〇選挙区（ザクセン州ドレスデンⅠ）の候補者に代えて、共和党創立者のシェーンフーバーを擁立したことである。

その前年、ＮＰＤは、九月のザクセン州議会選挙で一気に躍進、第三党のＳＰＤ（九・八％）に肉薄した。「ハルツⅣ」と呼ばれる労働市場改革、外国人労働者、ＥＵ拡大を攻撃する戦術が効を奏し、ＮＰＤは、女性（五・九％）よりも男性（一二・六％）、一八～二四歳の若年層（一六％）で高い支持を集め、実に一九六八年以来、州議会に議席を持つことになった。チェコに国境を接するラインハルツドルフ＝シェーナでは、得票率は二三・一％に達した。

ザクセン州ＮＰＤ議員団の副議員団長となったのは、ＳＳＳとの関係も取り沙汰されるウーヴェ・ライヒゼンリンク（Uwe Leichsenring）であった。二〇〇五年一月二一日、彼は、他のＮＰＤ議員とともに、州議会でのナチス犯罪犠牲者に対する黙祷を拒否、ドレスデン空襲五〇周年にかこつけて「爆弾ホロコースト」を非難した。翌年五月には、ナチ強制収容所に移送する「特別列車」が再びあってほしいと思うこともあると発言して、三日間の登院停止処分を受けた。このように目立つ存在だった彼が二〇〇六年八月末、トラックと正面衝突する事故により三九歳にして亡くなったことは、ＮＰＤにとって少なからぬ打撃であったろう。

もっとも、党勢拡大のための一連の動きは、党首ウド・フォイクト（Udo Voigt）に負うところが大きい。フォイクトは、一六歳でＮＰＤに入党、一九八四年、連邦軍軍人としてのキャリアを捨てて党活動に専念した。一九九六年五月に党首に就任して以降、彼は党の規律化に努め、「頭脳をめぐる戦い」、「街頭をめぐる戦い」、「有権者をめぐる戦い」に加え、「組織化された意志をめぐる戦い」を展開し、「右の人民戦線」を構築しようとしている。その遠大な目標は、「ＢＲＤの清算」である。ＢＲＤとは、「ドイツ連邦共和国」ではなく「ドイツ占領共和国」の短

縮形である。

フォイクトは、政治面だけでなく文化面のヘゲモニー獲得を目指している。ベルリン＝ケーペニックの党本部の裏には、宿泊可能な研修センターが設けられ、「ドレスデン学派」形成を目指した人材育成が行われている。

二〇〇五年一月一五日、フォイクトとフライは、「ドイツ協定」を締結、二〇〇九年までの連邦議会選挙・欧州議会選挙・州議会選挙で、ＮＰＤとＤＶＵのどちらが候補者を出すのか取り決めた。これに基づき、同年九月の連邦議会選挙にはＮＰＤが参加、一・六％を獲得した。これは、一九六九年九月総選挙（四・三％）以来の成績で、得票数は前回の二一万五〇〇〇から七四万四〇〇〇弱に大幅に伸びた。特に東独では得票率三・六％、ザクセン州では四・八％に達した。

五　連邦首相の地元での極右進出

二〇〇六年九月一七日に行われたベルリン市議会選挙とメクレンブルク＝フォアポンメルン州議会選挙は、改めて極右の着実な伸張を見せつけた[21]（表2）。

まず、アンゲラ・メルケル連邦首相（ＣＤＵ）の地元メクレンブルク＝フォアポンメルン州では、ＮＰＤは六・五％増の七・三％を獲得、特に第三五選挙区（ユッカー＝ランドウⅠ）では一四・四％も得た。ＮＰＤの得票数は五万九六七四であるが、前回の選挙から、ＳＰＤから七〇〇〇票、ＣＤＵから一万二〇〇〇票、左翼党から四〇〇〇票、自由民主党（ＦＤＰ）から二〇〇〇票、他党から六〇〇〇票、棄権層から一万一〇〇〇票程度を奪ったと推測されている。また、ＮＰＤに投票したのは、一八～二九歳の若年層の一七％、失業者の一八％、基幹学校卒の八％、実科学校卒の一一％に達すると目されている[22]。

表2　2006年9月17日ベルリン市議会・メクレンブルク＝フォアポンメルン州議会選挙結果

（単位：%）

	メクレンブルク＝フォアポンメルン州	ベルリン市	東ベルリン	西ベルリン
投票率	59.2（−11.4）	58.0（−10.2）	53.8	61.1
SPD	30.2（−10.4）	30.8　（+1.1）	29.8	31.4
CDU	28.8　（−2.6）	21.3　（−2.5）	11.4	27.7
左翼党	16.8　（+0.4）	13.4　（−9.2）	28.1	4.2
90年連合／緑の党	3.4　（+0.8）	13.1　（+4.0）	10.5	14.8
FDP	9.6　（+4.9）	7.6　（−2.3）	4.9	9.3
NPD	7.3　（+6.5）	2.6　（+1.7）	4.0	1.6

投票日のかなり以前から、NPDがメクレンブルク＝フォアポンメルン州議会で議席を取ることは予想されていた。九月八日に放送された第一テレビ（ARD）の州内世論調査によれば、NPDの支持率は七%であった[23]。四%が同党に「確実に投票する」、五%が「ひょっとしたら投票する」と答えている。マンハイムの「選挙研究グループ」が九月四～七日に行った調査でも、支持率はやはり七%であった[24]。同党の州議会進出を「よくない」と考えているのは八〇%で、「どちらでもよい」は一〇%、「よい」は八%であった。

これら一連の数値は、NPDの選挙戦の「成功」を物語っている。NPDは、州内の至る地域で、特に初めて投票に行く若い有権者向けの運動を展開した。「校庭CD」の無料配布は、当然である。また、スキンヘッドに軍靴のようなブーツ、厚手のブルゾンというお決まりのネオナチ・スタイルではなく、まともな装いで子ども向け・家族向けのイベントも開催し、自分たちが「普通の政党」だとアピールもした。

筆頭候補者のウド・パステース（Udo Pastörs）は、一九五三年生まれ。ニーダーザクセン州からメクレンブルク＝フォアポンメルン州ほぼ西端のリュプテーンに移った金細工師である。市民的な外見と、「鋼鉄の刷毛でクズを一掃しよう」という攻撃的な言動が、一部選挙民から歓

迎されたわけである。

選挙戦中ＮＰＤは、ひたすら「羊の皮」をかぶっていたわけではなく、暴力的な「狼」の本質も見せつけた。他党の選挙スタンドを襲撃したり、極右に反対するデモ参加者の顔写真を撮ったりしたことは、十分な威圧効果を発揮した。「ナチスに一票もやるな！」という市民運動は、結局実を結ばなかったのである。(25)

他方、ベルリン市議会選挙では、ＮＰＤは、得票率二・六％（東四・〇％、西一・六％）で、議席獲得に失敗した。もっとも、得票数としては、前回（二〇〇一年一〇月二一日）の一万五〇〇〇強から二万票以上上乗せしている。そして、ＮＰＤを含め、既成五党以外に、合計一三・七％（東一五・四％、西一二・六％）と、八・九％増の票が流れている事実は、きわめて重大と言わざるを得ない。

ＮＰＤは、同時に行われた一二の区議会選挙では、議席獲得の条件が得票率五％ではなく三％であることから、マルツァーン＝ヘラースドルフ（六・四％）、リヒテンベルク＝ホーエンシェーンハウゼン（六・〇％）、トレプトウ＝ケーペニック（五・三％）、ノイケルン（三・九％）の四区議会に、合計一一人の区議会議員を送り込むことになった。なかでも、党本部のあるトレプトウ＝ケーペニック区議会には党首ウド・フォイクト、またリヒテンベルク＝ホーエンシェーンハウゼン区議会には歌手ヨェルク・ヘーネル（Jörg Hähnel）が議場に座ることになる。これは、一九九九年一〇月一〇日の選挙で、共和党が二三区（行政改革以前）中六区議会に進出して以来の事態である。

そして、一一月一一～一二日、ＮＰＤは、ついに「帝都」ベルリンのライニッケンドルフで党大会を開催するに至った。「民衆の真ん中から」というスローガンは、「周辺から真ん中へ」という先の調査結果を裏付けるかのようで、実に不気味である。当日、連邦議会に議席をもつ五党は共同の抗議集会を開いたが、党大会に反対して会場周

辺に集まった市民の数は四〇〇人程度にとどまった。

六　むすびにかえて

極右の台頭に対する既成政党の反応は、いかにも変わり映えがしない。彼らは一様に衝撃を受けた表情を見せ、再度の違憲提訴を主張する者もいる。あるいは、逆に過去の経験から、今回の議会進出も一過性の現象にすぎないと決め込む向きもある。

だが、以下の理由から、そうした楽観論には根拠が乏しいと言わざるを得ない。第一に、メクレンブルク＝フォアポンメルンやベルリンに限らず、ドイツにおける政治不信・政党不信はますます深まっている。前出のライプツィヒ大学のブレーラー教授らが、「ドイツ統一」一六周年直前に発表した「ドイツの状態」によると、憲法機関に対する評点（1「全く信用しない」から7「全幅の信頼を置く」まで）の比較で、政党は東で二・九一、西で三・一二と、連邦憲法裁判所（東四・三九、西四・九三）、警察（東四・四四、西四・九一）、連邦政府（東三・二五、西三・六三）よりも低く、最低である。[26] この議会に対する不信の根強さは、二〇〇一年一一月にアレンスバッハ世論研究所が行った調査からも、既に明確に窺える。[27] それによれば、連邦議会に信頼を寄せている人は四一％で、東西別には東二六％（一九九一年よりマイナス一六ポイント）、西四五％（同マイナス九ポイント）であった。

そして、この一一月三日にＡＲＤで放送された世論調査では、ドイツにおける民主主義の機能に対して「やや不満」（三八％）ないし「非常に不満」（一三％）と答える人々の合計が、過半数に達した。[28] 四九％という「満足」派の割合は、この調査史上最低の数値であるという。

第二に、政治的な手詰まり状況を打開するために選択された大連合政権は、よほどの成果を挙げない限り、二大

表3　支持政党への落胆

	党に幻滅した	もう二度と投票しない
CDU/CSU 支持者	51％	22％
SPD 支持者	67％	33％

政党の野合と見なされやすい。六〇年代西独におけるＮＰＤの台頭も、連邦レベルでの大連合政権が一つの要因になっている。

そもそも、二〇〇五年総選挙で、ＳＰＤとＣＤＵ／ＣＳＵ（キリスト教社会同盟）は、合計得票率が七・六ポイント減の六九・五％と、凝集力の低下を露呈していた[29]。しかも、この「敗者の大連合」の評判は、発足一年足らずで、著しく低下している。マンハイムの「選挙研究グループ」の調査によると、プラス五からマイナス五の範囲で、メルケル政権への評価は、成立直後の二〇〇五年一二月に〇・六だったのが、この七月にマイナス圏内に落ち込み、九月はマイナス〇・三であった。特に深刻なのは、本来大連合政権を支持すべきＣＤＵ／ＣＳＵ・ＳＰＤ支持者が、いずれも大きな不満を抱いていることである。先に紹介した九月のＡＲＤ世論調査では、特にＳＰＤ支持層に落胆の度が強いことがわかる（表3）。

第三に、ハルツⅣに代表される各種の「改革」は、貧富の格差を拡大させ、広範な窮乏化現象を引き起こしている。それだけでなく、富裕層を優遇し、貧困層を国家財政立て直しの犠牲にする新自由主義の政策は、人々の疎外感・絶望感を募らせている。一一月のＡＲＤ世論調査では、六六％の市民がドイツ社会を「不公正」と捉え、「公正」と答えた人は二七％にとどまっている。しかも、その差は七月（二〇ポイント）、九月（二七ポイント）と、拡大の一途をたどっているのである。

先鋭化する社会的不公正にもかかわらず（あるいはそれゆえに）、自由競争・自己責任の新自由主義を信奉する政治家が、「リスクの前にチャンスを見よう。連帯と公正のために自由の力を

呼び起こそう。さまざまなアイディアを実践に移そう」（「統一」一六周年記念式典でメルケル首相）と呼びかけても、人々の耳には空疎にしか響かないのは当然であろう。そして、冷戦終結後左翼の対抗言論が弱体化した状況で、新自由主義者たちによる国家の国民保護機能の削減を阻む政治勢力として人々が極右に期待を寄せることも、それなりに理解できよう。

第四に、少なくとも二〇〇四年にＮＰＤがザクセン州議会に議席を獲得して以降、「右からの人民戦線」戦術は、かなり有効に機能している。今回のメクレンブルク＝フォアポンメルンでの選挙戦は、ザクセン州議会議員団長のホルガー・アプフェル（Holger Apfel）が指揮をとり、ＮＰＤをブルジョワ・オルターナティヴに見せる言説方法を持ち込んで成功した。もちろん、若い層への文化的ヘゲモニーが定着しつつあることも重大である。

今や旧東独五州のうち、三州で極右が議席をもつに至った。この傾向がさらに拡大し、西にも伝播しないと誰が断言できるだろうか。「わたしは民主主義のうちにおいてナチズムが生き存えることを、民主主義に敵対するファシズム的諸傾向が生き存えることより、可能性としてより脅威である、とみなすのです」（傍点原文）という哲学者アドルノの警句が、半世紀近い時空を超えて鮮やかに甦る。(30)

（1）Renate Köcher, Ein neuer Patriotismus ?, in : *FAZ*, 16. August 2006.
（2）Stephan Hebel, Gute-Laune-Patriotismus, in : *Frankfurter Rundschau*, 23. Juni 2006.
（3）Jürgen Elsässer, Der schwarze Kanal : Ein Sommermärchen, in : *Junge Welt*, 17. Juni 2006.
（4）http://www.faz.net/s/Rub4798C2FBFBD461B8A2C1EC681AD639D/Doc~EC0360851A27F49F2B8E8DD0871651IA8~ATpl~Ecommon~Scontent.html
（5）http://www.netzeitung.de/deutschland/363969.html
（6）Patrioten verwirren Rechte, in : *taz*, 29. Juni 2006.

(7) Klaus Wahl (Hrsg.), *Fremdenfeindlichkeit, Antisemitismus, Rechtsextremismus*, Berlin 2001, S. 189 f.

(8) http://forum.extremismus.freenet.de/app/m/_t188278cp15c34142pf-1st0nachrichten_Rechtsextremismus_unterschaetzte_Gefahr_Extremismus_Nachrichten_Politik.html

(9) もちろん、学校現場では、さまざまな暴力防止のプログラムに取り組んでいる。連邦政治教育センターも、小冊子「暴力反対の手段」(*Schritte gegen Gewalt*, Bonn 2000) や、テュービンゲン平和教育研究所編集のCD-ROM「暴力予防としての建設的紛争処理」(Konflikte XXL/Konflikte XXL_Global. Konstruktive Konfliktbearbeitung als Gewaltprävention, 2004) といった教材を発行している。暴力は、外国人敵視・反ユダヤ主義・極右と親和性があることから、暴力予防の教育は、市民的勇気を育成するものとしても重視されている。

(10) http://www.prevent-racist-attack.org/

(11) Kurt Lenk, Rechtsextreme „Argumentationsmuster", in: *Aus Politik und Zeitgeschichte* (=*APuZ*), 42/2005, S. 21.

(12) Oliver Decker/Elmar Brähler, Rechtsextreme Einstellungen in Deutschland, in: a. a. O., S. 12-17.

(13) Köcher, Ein neuer Patriotismus ?, a. a. O.

(14) 拙稿「ドイツの「戦後六〇年」」『季刊戦争責任研究』第五〇号(二〇〇五年冬)、二五~二六頁。

(15) http://www.fes.de/rechtsextremismus/pdf/Vom_Rand_zur_Mitte.pdf

(16) Annette Ramelsberger, Erkundungen in Ostdeutschland, in: *APuZ*, 42/2005, S. 8.

(17) Sachsen ist Hochburg der Rechtsextremisten, in: *Berliner Zeitung*, 22. August 2006.

(18) Eckhard Jesse, Das Auf und Ab der NPD, in: *APuZ*, 42/2005, S. 31-38.

(19) 憲法擁護庁によれば、一九九二年末以来連邦・州内務省により禁止された極右団体は、二〇〇六年一月現在、一三に及んだ。http://www.verfassungsschutz.de/de/arbeitsfelder/af_rechtsextremismus/

(20) その略称が、ナチス親衛隊(SS)を想起させるものであるのは、言うまでもない。

(21) 両地方選挙については、拙稿「深まる政治不信、台頭する極右―ドイツの地方選挙が示すもの」『日刊ベリタ』二〇〇六年九月二五日参照。http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=20060925165904l (有料)

(22) Forschungsgruppe Wahlen, Wahl zum Abgeordnetenhaus in Berlin und Landtagswahl in Mecklenburg-Vorpommern

17. September 2006.

(23) http://www.tagesschau.de/aktuell/meldungen/0,1185,OID5887766,00.html

(24) Forschungsgruppe Wahlen, Politbarometer Extra 09/2006, Repräsentative Umfrage in Mecklenburg-Vorpommern - KW36.

(25) http://www.keine-stimme-den-nazis.info/

(26) Ostdeutsche finden Demokratie gut - im Prinzip, in : *Frankfurter Rundschau,* 2. Oktober 2006. 報告書は http://www.uni-leipzig.de/~medpsy/pdf/deutsche_befindlichkeiten_2006.pdf

(27) Elisabeth Noelle-Neumann und Renate Köcher (Hrsg.), *Allensbacher Jahrbuch der Demoskopie 1998–2002,* Bd. 11, München/Allensbach 2002, S. 619.

(28) http://www.tagesschau.de/aktuell/meldungen/0,1185,OID6059584,00.html

(29) 各党の得票率は、ＳＰＤ三四・三％（マイナス四・三ポイント）、ＣＤＵ二七・八％（マイナス一・七ポイント）、ＣＳＵ七・四％（マイナス一・六ポイント）であった。ちなみに、投票率も七七・七％と、マイナス一・四ポイントであった。拙稿「『改革』に高まる不信―ドイツ総選挙が意味するもの」『軍縮問題資料』第三〇三号（二〇〇六年二月）参照。

(30) テオドーア・Ｗ・アドルノ『批判的モデル集　Ⅰ　―介入―』法政大学出版局、一九七一年、一五八頁。アドルノが「過去の清算が意味するところ」と題するこの講演を行ったのは、一九五九年秋のことである。